コビトカバの繁殖に向けた取り組みについて

1. はじめに

コビトカバは国内外において繁殖例が少なく、個体ごとの特徴を踏まえた管理が重要である。上野動物園では、1960 年に日本で初めて本種を飼育し、現在までに 11 頭の繁殖に成功した。このうち 8 頭は 1 組のペアによるものであったが、2021 年にこのペアが死亡した後は、同ペアの子であるメス 2 頭（高齢個体・図-1/若齢個体・図-2）のみとなり、オスの不在による血統維持が大きな課題となっていた。

そこで大阪市の水族館「ニフレル」から繁殖のためにオス 1 頭を 3 年間借り受け、メス 2 頭との繁殖に挑んだ。当初過去の事例を参考に同居を進めたが、1 年目は妊娠に至らなかった。この経験から、他園館の事例も参考にしつつ、自園の個体の特徴や状況に合わせた管理の重要性を実感した。本発表では若齢個体及び高齢個体における繁殖管理の違いと、繁殖成功に向けた現場での具体的な取り組みについて報告する。



図-1　高齢個体（2003 年生　血統登録番 019）



図-2　若齢個体（2011 年生　血統登録番号 024）

2. 取り組み内容

2.1 若齢個体に対する取り組みと環境改善

1 年目の反省を踏まえ、2 年目からはメスの発情が初期段階での同居を避け、行動観察等により発情ピークまで引き付けてから同居させる運用に変更した。

本種は主に水中で交尾を行うため、プール環境の整備に着目した。交尾中、メスが息継ぎをする際に、大きく体を持ち上げるとオスの体勢が崩れてしまうため、メスが最小限の動きで息継ぎできるようプールの水位を調整した。さらに交尾体勢をとったオスが後ろ足でしっかり踏ん張って体勢を維持できるよう、同居場所を床面が滑りにくいプールへ変更した。加えて安全管理の観点から日中に限っていた同居について、繁殖の機会を増やすため夜間同居も実施した。



図-3　同居の様子

若齢個体は発情兆候の初期からピークが分かりやすく性格も穏やかであったため、これらの工夫により円滑に同居のタイミングを見極めることが出来た。（図-3）

2.2 高齢個体に対する取り組みと環境改善

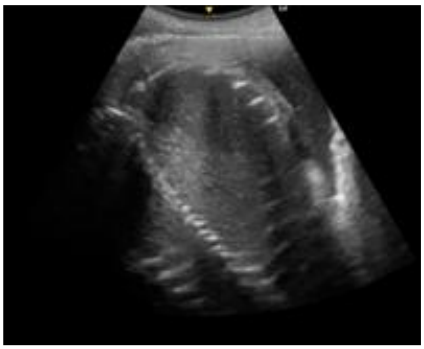
高齢個体に対しても、プールの水位調整や滑りにくい床面への変更といった環境整備は同様に実施した。

しかし高齢個体は、若齢個体に比べて発情期間が短く発情兆候自体も弱かったためピークを見極めることが難しく、同居時期や安全性の判断にはより一層慎重な対応が求められた。同居時に万が一闘争が発生した場合、人が介入して引き離すことは極めて困難であり、大事故につながる危険がある。そのため、同居の前段階として必ず柵越しのお見合いを



図-4　柵越しでのお見合いの様子

実施し（図-4)、メスが少しでも攻撃的な反応を見せるなどの不安材料がある場合には、無理せず同居を見送るよう徹底した。
　また、発情のわずかな変化も見逃さないよう観察を一層強化すると共に、動物と人双方の安全確保を最優先とし、日中の同居のみとした。


図-5　超音波画像

3. 妊娠・出産期の管理と行動変化

3.1 若齢個体における経過と管理

　穏やかな性格から妊娠期でも、問題なく超音波検査を実施できた。（図-5）栄養管理として状況に応じ給餌量を増加したほか、初産のため毎日陰部・乳房を撮影・記録し出産時期を予測した。出産数日前には夜間観察を開始し、複数スタッフが見守る中、落ち着いて分娩した。
　育児では、野生本来の「子を隠して母は離れ、1 日数回授乳する」、という行動が見られた。過剰に介入せず動物のペースを尊重したことで、母子ともに終始安定していた。

3.2 高齢個体における経過と管理

　高齢である点を踏まえ、若齢個体より慎重に、手厚い管理をおこなった。音波検査を行うためのハズバンダリートレーニング（図-6）や、分娩予測を目的とした毎日の体温測定を実施した。
　出産前後は周囲の変化に敏感だったため、直接的な刺激を避け監視カメラによる２４時間観察と静寂環境の維持に徹底した。経産のため初乳摂取はスムーズだったが、警戒心が強く常に子に寄り添う姿が見られた。産後の食欲低下や体調回復の遅れに対し、嗜好性・栄養価の高い給餌や室内の保温を行い、カメラでの観察のもと、より手厚いケアを継続した。


図-6 ハズバンダリートレーニング

4. 結果

　1 年目の取り組みにおいて繁殖に至らなかった要因を踏まえ、2～3 年目にかけて個体ごとの特性に応じた同居管理の改善を図った。
　その結果、若齢個体では明瞭な発情を見極めた同居により、延べ 17 日間・7 回目の同居で妊娠が成立した。一方で発情が不明瞭で緊張が見られた高齢個体においても、安全最優先の慎重な見極めにより、延べ 11 日間・7 回目の同居で妊娠が成立した。
　前年度の経過を踏まえた管理方法の改善により、両個体ともに事故なく安全に妊娠・出産・育児に至った。誕生した子 2 頭は、現在まで健康に順調な生育を続けており（図-7)、希少種であるコビトカバの繁殖を成功させる大きな成果を得た。


図-7　順調に成長する子

5. 繁殖に向けた課題と今後の方向性

　今回の取り組みにより、若齢個体と高齢個体で妊娠、出産および育児の進行に明確な差が認められ、発情の把握、妊娠中の管理方法、産後の行動変化などにおいて、個体ごとの特徴に応じた対応の重要性が改めて分かった。なお、発情の判定指標として糞の記録や糞中ホルモン測定も試みたが、有用な指標にはならなかった。コビトカバにおいては血中ホルモン値による発情把握が有用であるため、発情のピークを正確に把握して確実な同居・妊娠につなげるべく、今後は安全に採血を行うためのハズバンダリートレーニングの確立が課題である。
　国内のコビトカバ飼育個体はわずか 17 頭であり、一頭一頭の繁殖成功と知見の積み重ねが国内の保全においても非常に重要となる。今回の取り組みで得られたノウハウや行動データを他園館と共有・活用することで、国内全体における安定した繁殖や、将来的な繁殖計画の推進に役立てていきたい。